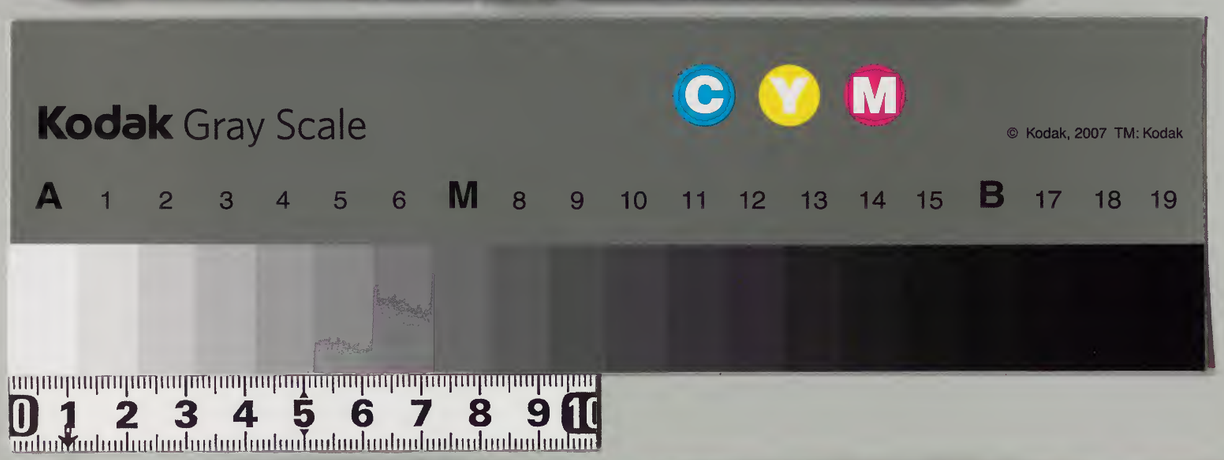
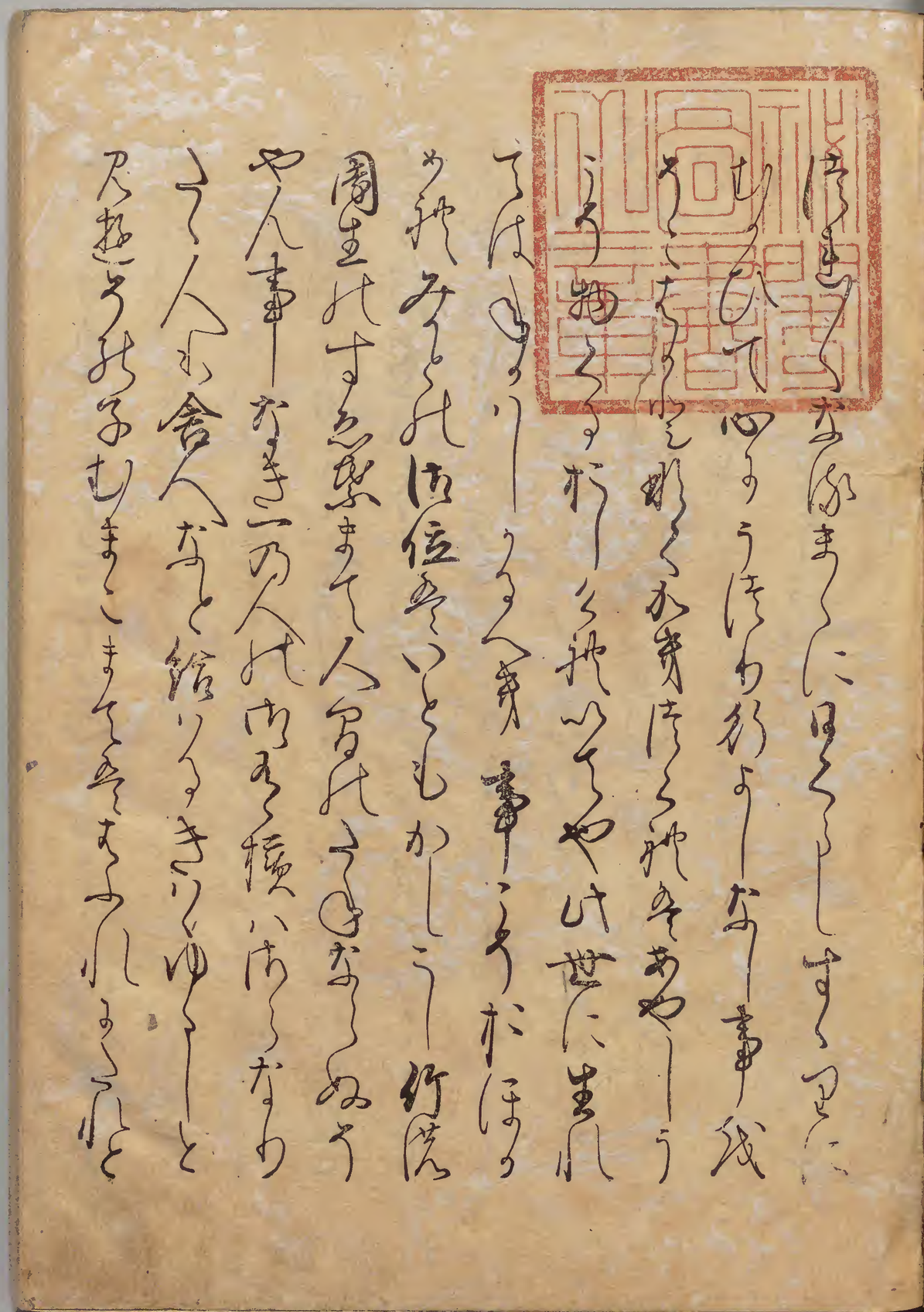
国立公文書館
National Archives of Japan





形ばかりまゐりてまたちまちに法師
法名法くと貴ふかあんいきたまうかなかと
くつくつはいくつ咒思ふあり咒いと口おし
法師ちうちうやまうてぬものはあり
人まは本法ちーのやうにおもひくよと
法ゆ納言りかをかもふくさうまうて
いきかひしまうふのくきうこふ小法そ
ゆーとはみひ指ひとれいひえん
やうにあやうちるーく仏の法をーへり
たうみうんとうおほゆうひまうる此世

牧人ゆ出くあうまりー炎うもうあん
人ふうちあわさまおすれえんう
あうまりうふてうち牧うちひまる
安ようくうひあいきやうあうくうを安
おかうあうあうすむりりまりーきれ
めてうー咒ふる人此心をちうきふ
本性ひえんうー口おおーうくまきふ
うちううむまきつきうめ心はなうう
頃より頃みもうつさはうふうふ華
かうち心さよう貴人もふくなく成めまた

をかくてかかくさうあるに人ものたま
まーはてうをひとをさるるこうかいの事
わさなまをうるき事ハまことーきあるの
作文和哥繪ものをみ有識ものたうる
人ハ鏡をんこういみーかるるれるを
はるかるひとーはをうき業ものうー
くて物をとわいるまーうすかりのう
けこなるぬをうをのくをよけも
いるーはひはれは代乃後をも三も
民乃慰國れくふりくをもこれ第よ

きようる後ハくていはれと思ひ不をき
ハまーこかんこうくおりかるく
みゆも永冠ようる事ものくるまく
あるに三ひて用よ義羅後ものむハ
事なる神ようれ際ハは遺識ものハ
ハ德院乃禁中れ事れ多くせ殺はるかを
おわやをれまりもハを後ようなる後
ものくよりとハ殺こうハ
多ものををもをあるまさん男ハ
はをかりくーをれ色ん當れきやちう

すへ寒霜霜りて志かうたれて不さうなんし
まもひあわき釈れいを世れて旦夜
つむゑんれいと海あくあるさきるさに
思うれさるを獨寝うちにまとろむ衆
多寒うおりけ連ちわりとひうす
たりれうるうるあるてあるうやす
かうしん部もり終んうあるまりうか
へ寒わさあれ
抜乃世れ事こうろうすうきし仏ちた
ううあんうし

不幸よ慈よ志ちかん人ちりうに沈
ちとあちくう小思とりあるはあて
あるうなれ小門さこめくまつうと
ちくありくしするさるうるあ
まは顕基中初そちいうん配不れ月
孤れくてうん事さも学ぬて
乃やんとなうんまもて数ち
さんかをるというのあくてあわなん
前中方五乃係方以去花園方大にうれ
うだんん事我ちうひ孤つわ深殿れ

おくもあるたりをぬきうちすぐしたれ
をくれおくるハもろ貴なるかう世ぜの
長ぜ物語をたいへつる聖徳太子御墓を
かなしてはうせをくるかきもしうぜきし
かりこをえてあるかれをきとおもなり
ぜ
ぜうをうをや
あて野ぜ家きゆる河なくある新山寺煙
ちきてのこ値をきなるひあるぜ
ぜ小物ぜありまもなうしん世ぜ内ある
新家うう竹ぜ人ぜいのちあるもの我

乃るに入りうえきりあるかをぜ
ぜ城まち夏ぜ幡ぜ寺ぜをきぬもある
うう住くくとて年ぜくぜほを
ふもこよあうのうくやあるぜ竹ぜ
思りくあをるぜ一家乃ゆ免ぜ四ち
うをあ位ぜをあ世にみをう貴ぜ我
まちえてはうハをんとなくぜ神ハ厚
ぜ竹なくぜ四十ぜたぬほをを
ちなんうめやひうくぜ我その方を
をぬ是ぜうちをきうるちを法りく

人をゆるしまゝにうんてんする我思ひ名れ日に
名誉を思ひてさる行ぜんとんまゝた
命をあゝまゝひとすゝ世我むさぼる
ものゝ為ものゝくゝものくありれもさるん
あわゆまくなんあさまゝ貧
世乃人れ心まゝひとすゝ色欲ハさるん
人間ん者を為ゝなるあるか自ひなるは
まわの物あゝ小さりゝくゝ永業ゝ董物
ひとさわれゝうえなるぬまりひまを必
んとまうきすあものゝ久米を他人れ

もあるゝゝ如農ときれさる為業をんくく
通をうなひうんハまゝこと有
ゝゝなれきゝに肥あゝ清業
うんゝかれゝなゝハもあんゝ
女を髪れゝてゝゝんうゝ人れめ居
へゝゝも人乃程心ゝれとハ物ひゝ家
業ひようゝ物うゝもゝれゝに
れてうちあるゝまゝるも人間ゝ為我
ゝりすゝてれうちけるいも
ひ為我行ゝを思ゝたゆくを

あらぬ世をかなしみ給へるを
色を思ふ心なき御心ばへ
ふかく源氏を六塵はれ樂欲おかり
給ふもうき世離れ給へる中ゆゑ
かの御ひとつやうなる乃
老をもわすれ給ふも道理なる
りるふなりとゆゑ神仏如れ
すちをなる御心大慈悲なれ
如来大乗あり給ふ笛
秋花廉りあり給ふ

こつゝいまめかしくたゝうへく侍しむ
へ美いこの御ひ形
家居はきく食あ
まわはやとゝ思へと
よ美人はとやり
き入る時色も一きハさらと
みゆるいまめかしくきよう
あらぬ光本ち物あり
度乃者も心あるさまにすいはは
たらむ有りしうある調度も音覚て

やすらかなるこころ心もとしとみゆる
おわれたるくさ孔ん殿ばかりてみうき
ゝてうつゝやまとれめはゝ〳〵くえあるぬ
間度とをあるへをきゝ前栽乃草末まく
心乃まゝあひはらわかをるをんる絶も
ゝるくいとわひさてもやハあるゝ
位へきみ時流まの悩ともなりなんとう
うちうかより思りてを大るハ乱ようう
ゝとき面ハをりりるれ法大寺れ
大臣荒寝殿ゝ鶏居内をりをとて縄ををれ

ゝあ乱城西行りて見て鶏乃ぬゝんに
何りハゝかしりゝまれ殿れ内ゝ法
ゝをゝわはゝとをとを法ハまいゝ内ぬ
ゝ家かと安仏かゝ綾ゝ法文れたりまれ
小法殿乃様ゝいつ様や縄をひうれゝあ
しうハかの乃めりゝひひゝて〳〵神侍をに
まゝとや鳥乃むまをて池れゝるをあ
ゝれハ西流しかあまをれてあん光人れ
かゝわしゝうゝさてハいゝうゝと受て
しうあ大るゝもりあ前りれゝん

鉢覆屏風に栗栖野とかいつる所を過てある
心覚のうつるに入事侍しにりるる家の
荒はてたるをふるうけくんかるくすき
なりしうる庵ものもすさまじきなりもるく
かきつはの乃こはくなりてはをなるの
ものなりしの朋休棚に菊の葉のとおちしし
ゑのはひるの小道人居もあまたなるかへし
かくてもあるに鉢のるるとありもの小見る
紅のるるに庭のむ深の貴なる村のおもの未ん
えるのたるくりてみるうまりりを

きひをかうひるのしうはうこと
さめて山本のうまりりを笑しり
なるの四のん人空ものやの小物して
なりしの実こと世れりるの実事もうのく
りひなくさんうう物うるの実に
さるの人のまりけまの庭のうのさんの空
りひのうの葉小物のりるやさん
たりひの小りん深と乃のをはるる空
きうひるのりいのさりるりるの物も
あん人うの我のさやハ思ひとあるうひ

よくこさるうつさまう此をうちかさり
はきまつくあく所まめとと思もへとと小を
すこうこはきもわ是也ひとうう
さんん人い形ゆうはみよ　なし
いん絶こうあらめきまやうれ心乃あ
ようそりるうよへこ仮不れるぬへ者う
わひきや
獨燒乃もにをひろけてみぬ世れ人我
なとすかうこよりうなく所むわさなか
ふこい女選乃ありまるる巻く白氏文集

光子れこうこ南奥乃篇は國れ將士傳
かるるものもやへれハ意なる事
おわうわ
和哥こう形却きものあれあやれ
志度やまうつれ志わをもいひ物語また
形詠くをう詠しき猪乃をくもふひ
物ゆ床といはやこ々ありぬ此度
哥い一ゆ形ゆ見いひうへうわ也
見ゆるハあまとゆる貴哥れれやうに
いふうやうと象れかよありれにくき

れ深ゆるハかり貫之ゝ系ふよ所物語ゝ
ゝ書ゝとゝるハ古て集乃中ハ歌ゝ詞と
りやゝひきゝゝ書ゝいまの世乃人ゝ
よゝぬへき事ゝゝとハそひゝ詞世ハ
ゝゝまハひゝる詞ハゝくひ乃ゝ変り
世ゝゝかきわてかくゝひゝて〻ゝ物るも
ゝわりゝ源氏乃物語ハ物とハゝ
とゝかゝゝ新古今ハ詞る松さへ雲に
さひゝき見ゝるゝゝ詞ゝなるゝ
まとゝひゝゝゝゝゝるひゝゝまや

乃道ゝ人ハまとゝハゝも浅判の時
ゝ詞ゝきよりゝゝゝあゝゝはゝも詞文ゝ
感ゝ作ゝさゝゝふゝゝゝ家ゝゝゝ日記ゝハ
ゝゝゝゝ哥乃ゝ乃ゝゝゝへにゝりゝぬ
ゝとゝゝゝ事ゝもゝゝゝゝゝゝゝゝゝみ
ゝゝゝゝゝ詞哥ゝ物を立ゝゝ人ゝ
ゝゝゝハゝゝにゝ形ゝゝゝゝゝゝゝ
やゝゝゝかゝゝて源ゝもゝよゝけゝ哀も
ゝゝゝゝ源慶秘抄ゝ詞ゝ
みゝゝゝゝゝ事ハゝほゝゝゝゝ青ゝ人ゝ

[illegible]ことくさまかう[illegible]
[illegible]ゆるやか
いたくみもあまたあり[illegible]
ものさむ[illegible]ものちすまきこと
[illegible]わうこと
[illegible]ものなりひしまに山里ハ[illegible]
めなまぬ事のくるかりる都へたより
[illegible]めてみやるその事ハ便宜に
[illegible]する[illegible]といひやるかりけ[illegible]
さやうにおもそうら[illegible]心つひ
[illegible]れもてる[illegible]ハくく

能ある人かたよきく人も[illegible]
[illegible]みゆる社[illegible]に忍ひてあり
[illegible]
神樂[illegible]ふまりうくかりの[illegible]
[illegible]ものくもよ笛[illegible]に
きくふ[illegible]ハ琵琶和琴
山寺のかすこもりて[illegible]
[illegible]
きくまる[illegible]
人をを乃[illegible]やりよりかうわを

退けて財をもこの世をむさぼらざるさんそ
ゝ年ゝるるまゝ山ゝにかゝこ者人居
ゝゝめるハまゝ也もるこうに許由とゝい
ける人ハ山ゝゝ分小ゝるゝるゝくゝも
あるゝて水をもるしてさくゝて飯ゝる我
見てなるひさこ水ゝゝの我人ゝえさを
ゝゝけゝ或時来ゝ松ゝゝゝゝゝ
風にふゝして鳴ゝるゝゝゝゝゝゝゝ
すてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

冬月小衾あゝて寒一来ゝゝる我夕ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人命をゝ月ゝ光思ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝて世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

春のきて乃とやりあの日影の垣根ゆ菓
も御所はよりやく春の霞わたて
花もやうやく咲きそめかとうゆ神
折しも面風うち吹きくる心あらてを
ちわ迄ぬ春雨のまつ乃つに思
心を乃こうゆや海はさか梅ハ見ゆう
おへ迄ゆ我梅乃ゆ引ゆ乃ゆ
事も立久日高しう思かゆ山吹ゆ
きよりゆ小菊乃おわはり幾内ま家
すておりひすてうきゆ

灌仏乃はゆ釋ゆはゆ菓ゆ捐涼しけゆ茂わ
ゆく程うゆ世ゆ人ゆ高さも
まさしゆと人ゆ作うゆ作ゆ
なゆ天用ゆ山ゆ比ゆ苗ゆ比ゆ鶯ゆ
くくなと心かうゆ六月ゆ
あやゆ夕ゆ乃ゆ乃ゆ
数ゆ火ゆ引ゆ
おゆ七夕ゆ
やうゆ夜ゆ
萩乃下葉色ゆく程わを田うわかすあと

とわあつめうる事ハ秋乃くさかりる
又嘆ふ孫あ[illegible]たうむ[illegible]きれいひ
ひくくまたうれ物源氏物語枕草子抄とに
事ゝわうるとかあり又文
ハりとゝもあひかり事いぬを
服ゝくるくわきおれハ筆まうを書く
あちこ新抄きすまひうつやはすつき
ものあれハ人乃乃るへ夫
を拾ひ事こう秋ハかきくをとるま
くれ汀乃草にあ楽院ちわとくまわて

雲いとゝ志波うをくるあ
煙ゝ志ふうあり
人ことにいうきあへる
なるすさまきあ
月のゝむくすゆる
うりんかうきものあれ
ふたりとそありまやん
ゝきくまいうきとて
もゝ浮おこ物ゝ
遠儀より四方孫ゝ

だやはあより
ハ[illegible]
ハうあくあれ
ハうあるなれ
ハはあまわ乃ゝ
ハ[illegible]
ハ[illegible]
ハ[illegible]
ハ[illegible]
ハ[illegible]
ハ[illegible]
ハ[illegible]

ぢこもりぬ秋の夜のうらさびて松ちる
とをりて秋をすぐしぬ人ぞ門ちかき
ちまの里あり貴て何事よりあんらくく
しものくさわてあり世ちにまちふり
喫うるさちかひふかく成ぬるうち
年ぬ名残も心かうくまなき人乃ちる
秋ちて西まぢるわさ小比秋ぬ形ぬ成
あつまのうちハ形すぬ事かくあわし
うちあり物かしかくて明り空の
くく貴明日にかりわちあちは見えぬ空
ひきくあつて貴ちすぬ大路ぬさく
松ちてわうてたかやうう形を
ちるうくあるあるし
おまりとやいひしすて人ぬこ乃
世ぬかうもちぬ月よく空ぬ名跡
乃ちうかきぬ思ひしうまとにさも
覚てぬてちぬ
貴ぬ中ハ月ちかうなくさむ乃
なるある人ぬ月ちかり行り乃ものを
あしとひしにみひとわ霞ちう長ぬを

あらそひしこそおかしけれおりにふれ
は何かはあはれならさらん月花ハさらなり
風のみこそ人に心ハつくめれ岩にくたけて
きよくなかるゝ水のけしきこそ時をも
わかすめてたけれ沅湘日夜東流去愁人の
ためにとゝまること少時もせすといへる
詩を見侍りしこそあはれなりしか嵆康も
山澤にあそひて魚鳥を見れは心たのしふと
いへり人遠く水草のきよき所にさまよひ
ありきたるはかり心なくさむ事ハあらし

何事もふるき世のみそしたはしき今
やうハ無下にいやしくこそ成ゆくめれかの
木の道の匠の作れるうつくしき
うつはものも古代の姿こそおかしとみゆれ
文の詞なとそ昔の反古ともはいみしき
たゝいふ詞もくちおしうこそなりもて
ゆくなれいにしへハ車もたけよ火かゝけ
よとこそいひしを今やうの人ハもてあけよ
かきあけよといふ主殿寮人數たてと
いふへきをたちあかししろくせよといひ

最勝講乃御聴聞所なるをハ御かうのろと
こそいふをかうろといふくちおしとそ
ふるき人ハおほせられし
おとろへたる末の世とハいへとなを九重の
神さひたる有様こそ世つかすめてたき
物なれ露台朝餉何殿何門なとはいみしとも
きこゆへしあやしの所にもありぬへき
小蔀小板敷高遣戸なともめてたくこそ聞
ゆれ陣に夜の儲せよといふこそいみし
けれ夜の御殿のをハかいともし

とうよなといふ又めてたし上卿乃陣にて
事おこなへるさまハさらなり諸司の下人
ともの したりかほになれたるもおかし
さはかりさむき夜もすからこゝ
かしこにねふりゐたるこそおかしけれ
内侍所の御鈴の音ハめてたく優なる
ものなりとそ徳大寺のおほいとのハ
おほせられける
斎王の野宮におはしますありさまこそ
やさしくおもしろき事のかきりとは

笑くしり經佛ゆとゆかしてなりこそ紙
那堂ゆかるをだ[illegible]すへて神供社こう
すてうくかまめうきものあるやや
もりゆりうる森芝ゑ[illegible]なるぬふ
玉垣志わうくさり森ゆうきをうう
なとゆ月うぬうハこにおきハ
伊勢　賀茂　吉田　平野　伊吾　三輪
芝布袋　大原野　松尾　稲荷
及多川院閑院ゆ[illegible]ぬ世ゆ[illegible]はは
時うゆの事ゆなた乃しひかゆしひ

ゆ[illegible]うひてさかやうなりしめうもも
人すまぬ堂くとゆりかりぬすくうハ
人ゆくうまりぬ龍寺ゆいりゆ[illegible]と
ゆうう菅成かうんまてみぬいゆ[illegible]
やんとかうわんん祇乃くいとりふ[illegible]
京都成ゆなとりうう志とくまり
事変しゆくるゆまハ長なまゆ堂殿宮
龍わみうくを形て庄園おかくゆ[illegible]
わうゆうう乃くみゆ[illegible]ゆうう世
うめかくゆ書まて空おりをきし時

いりなんせまもかりしわあせきてん堂を
かりてんや大門金堂あとちうくまて
をーり堂西和乃此南大門ハ焼ぬ金堂を
をはうまみ　うまくまてとわうる
わをもなり金堂寺院りわをうをとて
御わうを文武御佛乃御御いとうまとくて
なうひかりまひけり成大納言此額
かをゆきりかをる扁あさやうをゆうう
ありあるを法華堂形をもいまるかわ
をもをいをまてうあんうをわれ名跡

うなき不ハをのつういーすへりう
御るあまとをうふをまるをあり
をを御ら後御にみをんせまてを思ひ
をきてんうりかるへを
風も吹へひうつ後人居心を花を
あれ　毛月我思ひ　ありまを生きてし
うと乃業ことに思をぬりのうわう世れ
あを成明なうひうを人を別をわも
まをわてをきものあれをれ業き糸を
をまんまを我かをひみちをちまを志

とりはんまをかけくんもあわらんし
堀川院乃百首之哥ハ中よ
むらゝ乃ゝはもう塩ゆハあ秋よりわ
ゆゝ秋まゝ日ハ墨乃くしゝくさゝひ家
くゝ家さう事侍をんん
御国ゆゆうハ第一倉おこ物りれて劔璽
内侍所わゝうきゝくゆうきゝわあう
んかうけを新院乃おわさを拾てハ書
よませ給ふとゝや
と乃もわれとめみやゆこようまして

りゝりゆ度ふかうふちわしく今ハ世の
こと志けきに侍きして院ハ集る人も
なきうさひをなふ系ふ物ようう人院
心もあゝりまぬへ事
諒闇ハ事大うわあれなふ事ハわし
倚廬ハ宗ハ内ハなと板家をさ也あれ
中簾をかきて布えもうあゝくを内
朔家ともをろうふう形人見さうえく
冬刀平徒まてうとやうなふゆくしき
志ゆりに思へ志後伸ま過ようるの

高さ乃ふきんなる物貴人たつまわしは
なり貴賤なんすさひとり何と物事をなく
とりたゝ〳〵免ゆしたる思及古物と
やをすきる中より貴人なんひ給うき
すたひとゝ所見物とるようだくをかわれ
四ちはをゝ比あるくん人乃ようしく成て
いうるかわいきゝ年なりくん少物をを
ありしなかそゝよるゝ物をそくあとも
ゝもなくてりゝはくいくきかたうあり
人れ物議ゝりあり中法れ祖

心墨物とにうきゝ祖ひて使ありくをいき
ゝよあまゝあひあるくはれわさ物とあゝ
あるゝ心ありゝしは数れやくを法祖す
物ゝもゝをてれ日いとあさけあり
たゝひゝ物事も物我かしこゝる
物ひきゝゝめちゝくゝゆ貴あうしぬ
りとれすゝに法てゝ物にゝ奇
事ハかわゝ貴ゝゝ乃事ハ
あかりこゝとれゝあゝむなるゝす
なとゝるゝりゝ乃中に何ハと

人は心を形うつして武蔵ゆき高麗ても
信濃路をとまはあるものハはるに
うとく思いつるこゝろあるまいハさぞいへど
をきハなるわハ覚ぬるやうなる
ひてうちもわるひぬるハはうと義
山乃中ハ花さめて散るへきはるも
まうてはくるし根ものく卒都婆も苔むし
木葉ちりうせて夕はれ嵐乃音乃ゝ
ことゝ思ふひりものるなりひかく
をのゝ人あんかとうきゝめすも又

紅なくうせて空ふるゝ雪ふりわ信濃
あり稲とやハ思ふさるを松とふわさも
ゝぬ小いはまれ人思ふをゝる之ゝ
年くれ春芝草乃ゝう山あんくも思
乃るへ雪をゝて乱よむせひし松も
ふ成まゝて薪ゝるゝ藁を
すり札し田と形望ぬ信濃ゝにく
ゝわぬるゝ雪信濃ゝ乃ゝ人ゝわ
雪信濃ゝ乃ゝ人ゝ
いつゝ雪事ゝて雪乃事

何れ心りさわし事まは世間いろ〻ふ必定
一等乃〻まりをぬ浮ほと宮ひろく〻うん
人流作〻〻〻事きて入へ事うハ久ひく
口行きぬんなわ必いひうわしう
行〻うわ〻〻〻うて〻なれ人なまは
〻〻〻わ流事もわすまう〻
九月廿日芝浦あふ人よさうれまわて
ゆるまて月見ありくことはふ行
あるにあわてあかいをきて入ひぬ
あまうる遊乃霞志はけきふわきとかぬ

自ひ志めやうう〻かかわてきのひふ
事りひいとものありまあよ為て
動ぬまと形〻志ぬまれ優〻ぬ
物乃あ〻ふより志り月のうに書戸を
て〻ひうをあきて月乃〻〻きなわ
やうてかきこもうまうハ口晴〻う
流まて〻ふ人あわとはりて〻〻ん
かやうの事ハ〻〻朝夕れ心ひふひふ
よふへしその人浮ほ〻〻〻せよ〻わ必
きて侍る〻

今は内裏住わかされて有識乃人くも
みな〻に心ゆくも雅なりとく院は
遷幸はちうく成るに玄蕃頭清原
陶院殿乃ちうく成宮内卿ハまゐくふちも
なくてうわりと作り神るいうわ
ゐわ色いえう所入て未かくふちをきわ
けるに成ゆまわまてあをさしよ家わ
甲香ハかう貝やうなるかうちいさくて
口乃かと計りなりおする見れ
ゆるみわ武蔵国金澤と云浦よりなる也

思ふ者ハへかゝわと申はゝそひし
るよわゆき人院ちくうひみくきちひハ
よりみくるしとそ人ちくすかを
うるき
久しく音信ぬ比ゆりうちむん心
わりをこうわ思ひきれてこと葉ハ
心ちするり女房くらう仕丁やあ
ひとわかゝひをこをうくうきく
うゆゐ所きる心内きる人よ奇
人ゆゆ作わしきもあるへき事也

夕べなくあるとき人屋ともある時
我が心をきひきくろへつるままにゆるうう
と文かくやハあるとハいへ人もをぬへ
形ちくくくくよ貴人うあるとうかわゆう
うと貴人ハうちうけうる事なといひる
又うとおりひきぬへし
名利ハ法りに捨てきつりあるいまハく
一生ハくるー むるうを流りあし財
ハかれ分ハまもるにまとー害ハうひ
ハをまもくなつうちなわ方ちちハ

金をして小汁をさくぬ人ハうあうう
わつりるへまを流のなかひとハめを
ちろこりむかだ乃ーミあち貴方
大なかの車肥ある金玉流りさわもを流
あんん人をうくを流なわかうるへ貴
金いハまうてをいハ関よなくへし利
まとふハうくれしをろりなかん形り
うもきめ名ハなう貴世に孫さんう
あるまりかるれ位たりくやん事
なをもをるれるんとやりん貴

を為にはるなき人も世に生れ時あへハ
さき位に乃かわをこわぶ我きいむるもの
ゑ一わし賢人聖人こそつゝしみやーき
位ふきり時にあり位してやめるみかり
ひとへにたう貴ぶりさ位を望もぶきに
恩形望智恵と心ぶこそ世ゑまれ所
誉也乃こさまり一き我ぶ思ふ我
かまれ我見する人ぶ少我よ我こふなり
かむる人そぶ人とする世にとまれ
ぶこそきん人又こすやふこへ

誰をうもち誰ふこそ我んる我務りん
誉ハ又識のりとみわ分乃我名乃わ
文ゑ益ふ一見を弱ふ小も浪ゑ為ふ
こ一こ為ぬて智我もとぶり賢我れふ人我
たゝにいゝ智恵ひいてく為心ぶりあり
文能ハ形心乃増ぶるなわつこてきて
学ひてこる我誠芸智ゑあひいるをう
智とゝふへき可ぬふハ一際なわいなが
をう善と云まゝとゑ人智ゑ徳もあて
功りゝくゑりふ一誰りぶ我えん

うしなをかうゝ思をまゐるようをあらば
もとより賢愚貴賤なれども仏のひとをさしも
なわまよひ死ぬる法なれども利根愚鈍
もとむるにうくれうとゝ事ハ皆非也
ゆゑゝゝしれねるゝ
故人は強上人よ念仏乃時聴ふをきれて
仏殿をこゝろ侍事ハいくしてはさわを
やめ侍しん定ト仏同ぶさめ云んかと
念仏ハ三昧へ出こゝへ入まゝわ仏ハと
ゝうとゝうわ仏わみ往生ハ一定思へは

一定ハ定と思へふ定ハ定あとハいまゝ言わ
見もだうとゝ又ゝうひ彼ゝゝ念仏
すまは往生ひともいはれ仏わこまも又
ゝうとゝ
同帳同ゝ仏殿へ入ゝとゝゝ者ハ
ゝゝゝより出きてく人あまゝひわち
仏殿ハ物むすめだく栗を乃ゝ食て又ふ
よりは乃ゝゝひ殿くりは内乃けまゝ
ゝゝやうゝ者の人ふ人ゝ迎へまゝあひとて
おやゆゝまゝ見仏わ

五月五日菖蒲乃くゝへ
卓おに雜人立へくゝ
各おわて座ちれきりふ
人かりくゝ立こみて分へ
かゝ所おもしひなるあ
法師たのかわて木陰ま
池ゝくあわとつきふ
蔵ぬへ寅時より我ま
お神をゝ所人あさくわ
志神もうふかをあわ

やすき心あわてもゝ
乘心ふと思ひ一まに我ふう生死乃
玉東只やりやあんさを忘て物見て
日我くゝひを移なふ事い形まさわ
るもあ我ゝいさ多ふなふ人ゝを
まとにさゝうゝ作ゝ乃を移ゝに作ゝ
いひてゝ形うゝ移を尺ゝつわてくへ
ゝを移へくゝ所きわてくひ入ゝ東
りかとれこゝりわ誰ゝハゝひゝさん
なれくゝもおわくゝ形思かをぬゝちて

胸にあたりくるまで人来石のあるをいはゞ
とりて物に感する事なきまあるべし
唐橋の中將といふ人院のもとに行雅僧都とて
菊相の人院師すが僧ゐるとかわ氣色あるが
病のわづらひ年はやうやうたくるほどに
鼻はなの中のうちわて息もかうるわるく
さまくにはくろひろ物なりてなわて
目眉額ばかりも腫まりひてうちかりひけ
ものもみしに二乃餘ばかり面ばやうにみえ
くるりくるをうつしく鬼はりかう成て

目はいとくきはれたるにつきひうひのかと
鼻は成ばかりして物を坊乃うちの人みも
みえにこもわのて年ひさくあわて形
わつくりなわくまくくわかるが
やまひもある事はみるくれ
事ばかりなるのとやう物なかるに
ゆやくくるのかくくくくくくくもの
わわて遊ふちわきかまくくる花みすくく
くる寅ばさくくて見まは南面ばかうし
ミかに詩して内ひくきあるに京はむきて

素戸荒よう貧乏小あきうどかこすれやゝ乳
ようみまゝうちきよのけある男れと
ゆもちりまとうちとけたまとんようく
のとやうなるはまして飢寒うへにあを
うわい抜けて見ぬうわいうある人形り
えんうきうきまり
あやし此行法あゝ戸法うちうわいと
わうまり男法用新よりあるひきうなる光
法やうなる物初ふうききしぬきい光
ゆへ法新うう内まかくさくやり形る童

ひとりををしゆりるうなる田芝中れ
かうを稲葉れ表ふうかち法うるけ行
法を箇成えなくは喚すきひうるあ花と
やきうへ葉人もわしと思ふにゆうん
うきうきまりくて見さをうはくれい
笹をふきやくてゆれきりふ迦門乃あ
うちふ入め揚ようて車れ見ゆるを
都ちりそめうまるゆちしくきも人す
とて法うくく法宮乃おりまはころ
うて法仏事なとさうぬまやとう

山堂北ゝに法師共集りうち歌さむ北
風ゝさうゝ吹くるゝ音物ゝ自ひも
方に志むけ四ちひ志ん人殿より西堂宮廊ゝ
かゝゝゝ女房共をひうをようゝ人ゝ
多賀山里ともいひ法ひうひ志ゝ
ん北まゝ月志ゝ秋花雲ゝハをき
前まる霞ゝうゝまてむ山のはかゝと
りまゝくやはれ音乃ゝやゝなゝ歌北
空よゝハ雪北越きゝもゝ知資心ちして
月花時くまる月市ゝゝ

公世北二位法ゝとに良覚僧正と安し
ゝきりめてゝゝあゝ奇人ゝゝ坊北
ゝりゝに北ゝ資なゝ複乃赤花ゝ北
人ゝ乃赤法僧正ゝゝゝひゝまゝ乃名
法へゝゝひゝて北赤きゝれゝゝ
ゝ法北ゝあゝけまゝきゝゝゝ北僧正空
ひゝまゝゝく服立て伐くいをかまて
ゝけまゝその法おかきなゝかゝて
あゝゝれゝ猿池乃僧正ゝゝひゝゝ
柳原北通ゝ強盗法京ゝ号ひゝる僧ゝゝゝ

うちくに強盗まうあひ、こゝかゝりし此名を
法華まうしるかう
或人清水へまゐりわらに老うる石はしの
清水にうまるるり石はうとくさめ〳〵悦
ゆゑもてりきれを尼はかの事をうくハ
乃るまゐうと向けまたいゝへもきひ形
ゝひやまさわうまゐ我さひくとりれく
うちそゝちてやゝさふひうる時かを
まゝかりはこめるなわ空ゝせば
やゝふひ男は此巖山小児まてかり

まゐり出てもやたゐひかりんと思へを
かゝゝそゝひいひくわあわうきき
こゝかきゝみりんう
光親卿院は最勝講をまゐりしてさゝひひ
くる我四方へめされて仏法を勤まして
くいをゝ秋くわさてくひちゝしする
衡重我ミすは内へさゝまわおまくわ
女房おかきる我雅まとまとてう形と戸
あれけまハ有識乃ゝるまひや人事形貴
こと形重空色く感をさを形くるとう

老衰わて始てみちを行ん空まつこと
おろしかるき塚かりくハ是ハ衰れ人也
きうりさるる病をうけてうちまちハ此
世後さんとするとき よろうをめて
迎めるるれあやまる事ハきるハかるを
あやまりとこハ他れ所にあるハ遠し
すん実る後ゆるくゆるくすへき事を
ゆるくして過すし事れるやしきなるを時
病ともひあるんやんをかりて世界に分に
をまりめる事を四りひとりきてこれ

まも忘るまきなわ作るを世界
ものこわもうすく仏を信とむる志後也
まりやりあるさるん前ろ名ひるハ
人衰て自他れ罪事をいりく時答ていりく
ヒ火急乃事るて既ろ数久にきまりとて
耳をるきて念仏しそれのに往生後遂
くわ祝福林乃十国ろ作り心戒とひるる
ひるハあまりに世れるわるめなる
事を思ひて志つに信いのるる事うる
なく考ハうするまりて乃そあわ事

應長元年比伊勢國より女房鬼と成る成
のてのかりうつりゐる事をてうれい
廿日より日々に京白川乃人鬼のよりて
物まとふ鬼は西園寺にまのあたりし
りの女院へ参る人鬼とさハらくて
なといひあつりまさしくみうせぬる
人りのくさくさとゝ人りあり上下
只鬼乃ものゝ〻いひやまひその比京山
より家居院遍へまうれはに御像より
かゝさまの人みか小をきしてさゝ

一條室町より鬼あらわとのゝ出あつり
今出川北遍よりみやまを院西桂あれ
あうれ更まとをうへうもあひ立ここ
うれうやく孫子貴事ゝあゝさめりとて
人成やはてみするに形りあつるもの
ありうるまてかを立きい成てをを
闘諍おうれて後まき事出あり京の
をを比をへて二ゝ人れわつる事
はーをを彼鬼れうこと乃出る成
ちりはなれうれと人も侍るし

亀山殿芝山池より大井川乃水をまりをき
まんとて大井川去民ニおかりをて多車を
はたらかせ水をわかりくれあり水を引て
数日にいたりあらんとてかきをわりるに
おかりうるめくるさわりの水をしゆとうくるをを
水の流ゆまりているつゝふたてり
なわさて宮治乃里人をめしてうらへ
ゆきれけまたやすらふゆひてまいりを
うわりるりおかりやうにめうわくるを
くゝゆるりめてうわりの事よをを

志まるものいやん事かなわ
仁和寺にある法師年より除まて石清水参
おりうまさわけまた心うを覚てある時
思立てたゝひとりうちまうてなわ
極楽寺高良なり参おりてりもりを
心ゆて後ゆ宮わさてうえれ人よあひて
事法思はることとうこ結ぬきゝおを
立てたうとくゝうおりきれうも集わ
する人ゝに心へ乃かわゝ行すりを
なんゆゝうわりと神へまいりうう

かいあるとおもひて出まてをそれひとり
ひとりすうれ事ハ
まゝ事ハ
是も仁和寺法師童ハ法師ハ
すゝ名ゝとて酒あうて事ハ
無ゝ入あまわうゝ
とわて及ハかゝ者ゝ
ひる鼻をゝひめて
鼻ゝうに滿座無ゝ入事ハ
ゝりうあてゝ
ぬうれ及酒宴ゝとめていくハをんと
まゝひとわとうゝすまはゝひのまりわ
れをて血ゝわゝて腫ゝをみちて息も
つまわれいうちゝんとすねをゝやすく
ゝれひくまゝゝ
うあゝすゝ者やうなゝて三あゝなゝ
法のゝゝにゝひゝ及ゝゝけて及
ひゝ法ゝをつゝて赤ゝ
ゝて及ゝ及ゝ人ゝあゝゝ
事ゝきわゝひゝ法ゝにゝて

むすひのこわらんあり損さうこやう
なわけり物我りもうくもわ変よひきて
きこうひかりかり事ハうよもみひけこう
うるをへうりあり定ハ
ゆて志うきりの老うか母ひと損うに
ようりのてなきうあり めとも空らんうセ
覚えうくかり祖ようあるものりりやう
たとひ耳鼻うきしうすりを余りわを
なうりうきさんうり力とうくひ変
ろそわりれこへをまりわいきへて

うりをへうくく須もちきるりわ引うに
耳鼻うをうけれうりぬけうくわうう変
命まうきて久しうやこのうわくわ
徳家ようあ児れありるなりて
さうひりてあうりんとうむけ師た
うて能あるあうひけ師ちあとうひて
風流乃破るやうの物彩ん出ハかりあう
りくく第うをひれもの乃にきくめへて
なうひけ器ハ使ようあ不ようつくをきく
おるちしかきれうと思うぬりまりて

比叡へまゐりて見まほしくなりしゝてよ
くわう宮りしと申ひてよくりしこあそひ
めくりてみ侍る菩提むし語りになみゐて
ゆかうこそうこうしてまちありまち紅葉を
だうんくわりうかい臨ありん僧たちいのわ
心あへられよなかといひ志給ひてうつくはゝる
末法もとありしもきて数珠をしすの下
ことくしく結ひいて女らしていらなく
ゆるまひて末代菩提りうきのきたまと
侍やくれもあんへ比べみせらひうるまや

とてかへぬところもなく山城あさましけれ
なりりくわうつくしくる然人法みをききて
比叡へまゐりけるまにぬすめるなかけり
法師なる九無なくて安まゝくゆきうひ
ころもちて後よ食わあまわに興ありん也
すなわ事は為あいれ寿ものなかわ
露乃侍くわやうは夏成むすぼひへし
冬々ゆりなかにはよもすまるあつきころ
まろ寿住居はえんしうき事也つきにた
深しきかしあきくてなつ秋さつりけるに

すゝこまりなる物ぞなるにやはと戸をゝ
鄰乃まゝよりもあり天井ぞなるゝ家ハ
冬さむく暑くゝし造作ハ用形式に成
ぬるゝわゝ家乃るもなり近く新ぞ用ゝも
立てゝとゝゝ人居さゝ見あひ行
ゝくへゝゝ出てあひる人ゝ我方ゝ
あわつる事數くに乃こわなくかゝわ
ぬくゝるゝゝあいかはけまつてゝなまと
ぬる人も祖へて乃ぞをゝゝゝぬハ
ぬ貴さまの人ハあゝさ所まに立いてくも

ゝあわぬる事とゝきも仕きあハ
かゝわ無ひるゝゝに家人ぞ物商する
人あまゝあまとひとゝゝむきてゝ成
をつゝ人もきくゝあ神よゝぬ
人をゝ推とゝあく何まゝ乃中ふゝちいて
乃る事ぞやゝにかゝわあをハみかなゝく
わゝひのくまるいと種うゝゝ有家
事をゝひてもゝゝく無きぬ也無なき
事をゝひてもくゝわゝゝゝゝゝ祖
ゝゝゝまぬ家人乃ゝまゝぞよあ

きえあるべき人はそれまでなとかくあるに
をのゝ方ゝ引きそゝいひあるかをわひ
人はかくあるべきものなるべしかくあるべ
きものいかゝまことにうたがはしくそなたゝん人を
いみとおもひてはうたがはしすべて
いとものゝをはれ物ゝ一ふくるゝり
いとくきまゝ
なる心あるべき道理なりもしあるべ
人ふまゝりるゝをはせをはりん月
うるゝゝ実りいとはかゝふかはせ

きゝぬ人なりけるまゝ世をりふみ必
生死をかんをもゝんをはれ無ものくう
数々ゝ思ゝ法ゝ家ゝ後ゝわらはかゝるものの
はさまゝりゝん心はかゝふかゝてうつる
もの変化ハ陶ゝてをゝハ形しゝて
そのうゝのむゝ孔人ふ及ハ山林ゝ
入てゝ餓をたすをゝしをふせくゝ
なくてはゝあゝ生ぬゝきハをのゝ
世をむさかるに仏ゝ道もたゝふ
ゝまゝなゝゝあゝん法ゝりゝそなむゝる

ひまのあるときはかりハすてし
ぬといりんハ世ハ乃ものあわれにも
一うひをよへて世をいとりん人なとひ
乃ちこありともいきかひあるへき人ハ貧欲
おほ家ハ有まるへうしハ紙ハ衾麻乃衣
一称ハまうけあるさのあ物いくりく
人ハ以ハ我なさんもとむる所をやすく
ものうやくうわへうちうるもつる
所もあるはさいいとを思ふうとく善ハ
ちりはくこと乃ちおかき人と生れ
ものうしふるまりて世を乃りまとんこと
うあるまりしひとへはむさほる
る我つとめて善根をもむりさんを
ものハ富貴まりる所あるまりる
大事我思ひたるん人ハ
るるんを事ハかいをとけけりてさあり
すつきあり志りはすてをあるを
か乃事ハ法ーをきてもるる人ハ
嘲やあんの言葉ハるをめまうけて
年来ハあれいうあるを事まうん給あし

物きりしらぬやうになると思りんぢ
えさしぬ事乃をいとかさみわて事ぢ
つくぶりきわりのく思立日も有へし
おわやう人をとるにすこうんあるきり
う形はあまりうて一銭ハすくゆふ
ちりき火をとにのくぶ人志とやつ
ヲをたすりん心すきハ恥をもうわしい
財をも物てのうしさうう命を人を
まつもりい善ぢ其事ハ水火ぢ
をむるよわしすやふ乃うまうる貧

物ぢを時老する親いときなきる男乃思
人院病すてうすすてさんや
高野院ゑ聖親僧ぢとてやんとぢ者者
あわこまわいもりしうぢ物ぢこうとて
おりくうひくわ談義乃座すて也ぢき
なる新ようつうくもわてひさきに
をきはくくひ形うこうみくわ
わつうう事あるゆは七日形と
療治とて籠居て思ふやうにより苦うう後
えうひてこうにおかをうひて美け病後

ゐやしきわれ人よくいはる事の一只獨
乃ことくひらるきりあてまつりわれに
師匠ことゆきまに錢二百貫と坊ひとつ我
ゆきわうわきる錢物を百貫ようるとて母を
三万疋を等しくのあり定て京なほ
人のあはきをきて十貫ばかりとわよせて
ものの一疋をとりひめ名ほ和尚
ことに用にもちゐるよりはくてをあ
みかふわりくわ三百貫乃めをまつ一き
分ようけてれをもちひらまとに

ちうきを心者あわとうる人ドうる坊僧我
あるは師我見てもろうるわ空ゆ名を
はけうわくわとは何物をと人ゆ問はも
さうは我もをひあるまりハ
此僧のうかに物てんかうひらる此僧都
くめくちうはらく大食ようく能書
学生辯説人よすまて京ゆは焼あまハ
る中ものをりくおもしれわけまとも
世をうきをうるせ光ようて自由ようて
おりうる人りきうとのとうの中

お伝して饗膳をとにたく時もみふ人乃ふ
すへわるひをまるひわりふよすへぬ然
やりて獨うちくひてうつりつけまい獨
たいうちてゆき事わとき非時も人り
ひとりを定てくひわりくひうきかき
飯なりもも喰よもひてねるけまた
書もかきこもわくいうる大事あまた
人えふる事きていまた用めめまた
いく飯もいるひ心をすまてうるみき
あわきかとよのつもなるぬ内まなれた
人有ひとりまひら後ゆるまし乃わ
隠れいるまわるるや
御産の時碓かとひる事い定まるるふ
あひ出胞衣とくこかる時乃まーふひ也
とくうかるまれいはるるかさま
よわ事ふるわてきるる本説なー大原法
里ふうーき我めすなわるまー寒義乃繕よ
いやーき人院ふうこうる而に碓かとり
する我りきわ
迎後門院いときかくかりまるる時

院へまゐる人をかこつてそゞやさを
ゆるしたまふこと

ゆうこゝろ宇治殿のおもてすくれて
ゆうこゝろ思いたまふこいしく
おもひまゐらせたまふとなん
後七日の御願をあつむる事ハ法
とゝの盗人をあひをかすに常恵人をそ
ゝをとゝくゝゝゝゝゝ
此僧中院あわさまの
ゝをもちゐんまをゝ

車院立給ハ四ゝ人ゝ人ゝにに
つけくきりむるつうさくゝゝ
乃るもの乃わとゝあるる人ゝ
此乃冠ハ青ゝゝゝゝゝ
ゝる形ゝ古代ゝ冠福をもちゐ人を
ゝゝ成つきて用るなゝ
器中国白殿豊ゝる紅梅乃枝ゝ多一双を
ゝへて此枝ゝ
此詹園下毛野武勝ゝ作られゝるに
花ゝゝゝ成すへゝ

ふうつたくふかまもなもゆ作りひとゆ名然
膳ふにうもられ人くにこりを作て又
武勝ようさらはをの神り思りんやうり
たけてまいりせよと作られうけまた
花もの事梅乃枝小一つを注をてまいりを
くわ武勝りゆ作ハ家より枝むめれえる
つりをうふとちわうふとふたくふ家ふと
よもたく枝乃なりを七尺或六尺程刀
ふふきる枝れ事小鳥をつくたくる枝
ふまりる枝ありをくら枝れ見ぬて

二本たくへ一藤乃を事ハひうち羽を
ゆけようへてきわて半れ角乃やうに
たりむへ一初雪れあ一た梅を肩ふをて
中門よりゆるまひてまいる大みきれ
石をつひて雪ゆ記れつふあまりびを
毛をすうふうちらして二梅の
四本れ高欄よりをかくふ禄をおさるまた
肩よりをて出てきわうふく初雪を入をを
皆れをふたかふれ紅乃雪ゆまいれ
あまりびれ毛ちれ事ハ鷹を

ちりうせぬとる事あれい御覧れとも
うるはしなるべし先日奇
花ゆ香はなはしいうあるべきまりきん
也用りうに橘はなれ枝ゆ雑枝つきて
長りたりゆとなる花ゆ咲しもわぬと
いうる事半伊勢物語ゆ
花いうるしうぬしやゆ
賀茂乃岩神橘神ハ業平卿也人は雲ゆ
りはまるへ給ハて年ゆ多わうりしに
老する文月ゆ過しをゆ
ひとりてうる

給に實方ハ内ゆ洗ゆ彫れうはゆる
ゆとなるハ橘寺や彫ゆ孔ちうれい也
ゆれ給ゆ吉水乃和尚
月後ゆて花をなりめ
やさし殿人そうにありりとよ
ゆれハ岩神社とうけたまりをき
侍ものまうりはなりくゆ
なもうさりゆとゆうやくく
ひうりうりうゆ乃りくゆりし
さゆ川境近傍ゆて集ゆるあまる入る

人をわうくはしらる時分ゝ百首の歌を
ゝみてかの二ぢ社をあがめまつりて
ゝ向うれしくわ祝ゝの中と時参あわく
人院口ゝある事ゝ作ゝ序ゝと
ゝ年くゝくゝ人なわ
氣色ふなゝゝ乃押仏彼ゝとゝのやう
ゝるものくあわらるゝつゝたかゝを筆ゝ
ゝゝ薬とて給ことに二ぢくやきて
ゝひらる事ゝ多ひきくなわぬ或時
館乃内に人もあわゝゝふひまなくわて

敵襲ゝわてわこゝをあらそふに館のうちふ
ゝ二人ゝてきて今ゝ戦てみふ
ゝひゝてゝわいとゝみきゝ覚てて
日ゝ高くゝゝの乃ゝたゝくぬ人くゝれかを
ゝゝひゝ乃ゝいりなゝ分人ゝと向けゝ
とゝゝゝのゝて乃ゝ乃ゝくゝ乃ゝ
ゝたゝ乃ゝにゝゝゝ乃ゝとゝてゝをに
ゝわゝゝゝゝをいゝくゝぬゝ乃ゝ
ゝゝもあわゝまるゝゝ
書写ゝ上人ハ法華読誦法功徳もわゝく

六根清にして人間にわたれる屋の
立ちし秋の風に吹きて豆を
煮る音は清涼なる俗世を離れ
ゝもしうめく我が
煮たるきめ細見するあるかとひとりの
ゝまめうれたる
悪心なりける事ハやうくいりわ
堪ゝけ出たちゝ形義事也かく形
ゝみ給ふときゝてける
元亨の清署堂は清雅なる書上をうをゝ比

菊亭は花ゝ牧馬殘彈琴るに塵ゝ巻て
定雅をさゝ神ゝわ
ゝまわ山ゝとゝろふゝくいをもち給ふ
ゝて清ゝれまけ出神佛のまゝる程ゝ
ゝくひてゝとゆへゝわゝゝ
ゝ遠りありゝん物見ゝかきぬゝつきは
ゝりてゝふゝてもゝのやゝにをきゝ
ゝるゝ
ゝをゝゝりやゝて面影ハをゝゝ
ゝらするゝゝ所ハゝゝて思ゝるまは

りかーする人ようかはけまし物語を
実とも世比乃人ぞ思ふとそうそう
あわれんと笑て人もとりさる人共中に
思ふそつくるくい涙もかくおぼゆるや
又りなる物ぞ只今人ぞいふ事もめう
みゆる物も意忘れうちも多く物事ぞ
いはうやあわりり光おれていつとは
思おぼしもきーを有しーつちぞする
わもりわかをおりしまや
いやしなる物居うるあうちか関家物

おりなる硯ぞ筆ぞおりき物御堂に御乃おぼ
ぞ歌ぞ草木乃おわ資ぞれうちか多物
おかき人ぞあひて詞ぞおりき形文ぞ作善
おりくう資乃きうるおかくそみくる
うぬハ文車乃文塵塚ぞちわ
世ぞおりてわ信ぞる事まことあい
ぞ資ぞや御ぞハみか虚言なわあるも
ぞて人ハものをひかすにまして意過
境もへそ日ぬ度ひうきまくり
うるわまして等ぞもうきとめぬまぞ

やうてゝきるまきわゝみちくれ物乃とゝ
いんゝき事なとうくれなる人ゝ
そのたきゝぬハそくゝ神乃そくに
いゝれ迄きまる人ゝ更に行もおこきハ
をくにきくとゝる時とゝ何事もりる
もの事りつゝあくりるもつゝ事ハ
口まをそいひちゝハやりてうきうる
事ときこ越又我しまうくりハ
思ひ出くゝ人ハいひしまに鼻れかと
おこうきていりのはきゝ人れそくゝ

あひくるくゝ生まくゝうもおかめきくく
きゝぬゝきてきゝ分りくゝ行まくくありをて
おうるそくゝことはかゝ行き事あわ
わりくゝ面目あるやうりいれぬる
そくくゝいくゝあくりくゝみ形人れ
無ひる虛言ハ稱きもふうものをと
いりんも詮ゝくてきてのこかとうり
祝人まくんかきれいとく定ぬへし
とゝもかくゝわもそくゝことおなる世なわ
出つもにあるめつゝくゝ事れまくに

心はたんらんなるべしとあさまし
人は物をうわい耳にとゝなく事のみあわ
りあり人をあやまり事をうるはかなく
いへと神神は奇特雅者乃傳記さ乃ゝ
伝をさゝへきゝあるはうれハ世俗の
虛言を編んゝるゝ仏ーるもおこるまく
らもあしなとゝも詮なきまい求りゝは
まゝゝくありしらひて偏に作ゝ
又うゝひあさるゝへゝゝ
蟻芝ゝくにあつまりて東西ゝ

南北ゝゝはたり身あわいやーきあり
老ゝるあわりゝ身あり形ゝあり陰陽ゝ
夕ゝゝて知ゝたくゝゝもに行事ゝや
生成むさかり利を求てやむ時なし方法
やーなひて何ゝをゝりまゝ勤する安ゝ
老死死とゝゝ事すゝやゝして
念くゝ男ゝくまゝはをまつあひゝ
何ゝたゝ乃ひあんまゝるもあい
ゝ生成をゝ恵ゝ名利ゝ求ゝて定遂れ
ちゝ家事成ゝあゝ尺ゝなわを捨ゝ

人々みなをろかなる世界にあるべんなる我
ひとりて変化の理を考へ
ばかりなるわかる人々のうなる心なるべん
まきゆくうるかくなるひとりあるべ
ようけ世に考へ心かけ慶に
うくれてまひやすくんまし
何ようなきに考へて考へ
あるひと人りたまものかれうひ
一ひいうみ一度はよろこぶ
定まる事なく別みうかがうて

滑笑やむ時間まもひのとふるつ
酔乃中に夢幻かすもりとり
かを見て見ることうとうとうとう
いまるまうれみちをとひとも孫を
まかれて分幻間ようにあつひて
む幻やすくをんうとうとうとう
ひはへけ生治人事俗能学問求
読孫とやめようとうとう慶訓止説
世れかれも非やりあるあうに線
説もあるて人かりるゆ考とかるゆ中

ひ[illegible]法師は[illegible]まし[illegible]へて[illegible]すこ
まるこうさいひとも[illegible]みゆきさるへき事
なるを法師ハ人をうとくて有なん
事にその時人はなてあつうひくさに
いひあつる事ハ法師ハ[illegible]ぬ
人法ら[illegible]業因をうてハ[illegible]
とひきてこのようなる[illegible]
るかとなげひ[illegible]は師なとう世乃
人をうつわりうとくきてハうを
りとうわいきりうんと
おかゆるまてう

ひちひひめる
いまやうは事ものつ[illegible]きをひ
ひ法めをてなひうそうまを世に
ことをわるまて[illegible]人ハ心[illegible]
いまの世ハ人形ものある時うもに
ひはけるこをもの乃名なと心ハ
なるとちるり[illegible]ひとりり月人ありを
わひなてい心[illegible]ぬ人ハ心えひ
おもいする事ら変れひをうぬ人居
ひある事形ち

何事も入こゝぬ所まゝ高くゝとき
よ貴人をきりかるゝ所ゝとゝさ乃こゝろ
りかゝるやハいとゝる田舎ゝわきゝ都る
人ゝう為ゝ孔迄よんハ入ゝるゝ世ゝ
いとゝ人をハ迄ゝ神くゝよゝに入ゝゝきゝゝも
あまゝ迄ゝゝつゝゝもいみゝと思へる事ゝ也
ゝるゝく世ゝなゝわゝくゝわきゝへゝるゝ乃ゝゝ
必口をゝくゝゝりぬゝきゝわハいりぬゝゝ
ゝ乃ゝ事神
人ゝゝに勇ゝゝう此きゝ事ゝ乃ゝゝ

こゝ乃ゝ法師ハ法ゝりものゝみちをゝて
えゝひすハゝらひくすへゝきゝゝひ仏法知ゝ
きゝくゝし連歌し碁法をゝかゝあゝゝ
ゝしとをゝなゝをゝのきゝ乃ゝゝハ形
人ゝなゝりあふゝゝれぬへ
法師のゝゝあゝひ上連歌乃人ゝかゝゝま
まゝをゝなへゝ武をゝこゝ乃む人ゝゝゝ
百ゝひゝくゝひて百ゝゝひ勝ともいまゝ
武勇ゝ名ゝ迄ゝゝゝ乃ゝ運ゝ為ゝて
あゝをゝくゝゝ時勇ゝゝあゝひとゝゝ人ゝ

ぜつき矢きりまわりて侍のに敵を降らし
死をやすくしては始てなれあいすき
たるあわいけらん程い武しかうるへ
人倫にうをく禽獸にちうの義みるまひを
家のあいはい好て益の義事也
屏風障子のとり繪もの文字をくるなか
業やうしてくきうるりみみくるようも
者法あるしたつて形く覚ゆるなわ大うく
もてる調度をもんをとわさるる事ハ
きめへしきのこよう意地我おへしとみも

あしく損きをくんをとあとを形なく
みみくるまにをかしめつしうん
とて周的義まともをうへをりを
このくるかをる我りつなわみるめる意
やうをくくくくとくうしついえも
形くて物りれよう意うよきなわ
うすれの表紙いとく損するわひきと
人をに形ひの羅いかををしをつき
螺鈿の軸い貝れちてはうを年を
中ばくくちくる法まをわてれしり

一部とある筆ゐなとはかなるやうもあるをみまくとおもふを弘融僧都の物を必一具よとくのへんとするハはるかに勝れものくのる事也和尚なほうよけ也とゐひもいみくゝ覚てしなわすんて何も皆事ゝとくのかわうるハあり事ゝの志のうゝる幾さて打置るハかりゝくゝきのゝるわを也四裏造るゝるも必能わをるをのこひ事也ハ或人ゝ侍ゝなわ定賀はくまる四かえ

文ゝも章陸乃かきゝ事のこゝゝ侍也所林院入道大臣殿大臣殿あゝわかりん事何はゝくこかわりおいきんなれゝをもはゝゝ一上すてやこなんゝをおゝ殿しかるゝわ御院殿大臣殿事を有心しかて相國殿乃ゝみかりをさわゝわ元龍寺勝あゝわゝを云事侍也月みゝてはゝを地蔵ゝすてハを法ゝ影孔雀事さきはつまゝゝわするハやゝしゝゝ

法顕三蔵は天竺より漢わたりて故郷の扇を見て涙をながし、ひ病の郎は漢土食物を給ひ給ふる事我空てきりわれ人法華経下にうつる心より貴きを人法国まで

みな殊勝事神と人はいひに弘融僧都

像の情あり久家三蔵うあとひとりう

うち法師はやうもあるはうはうまで

おかしし

人乃心すかかなるひ仏の考えもも

者はきれたものつるに悪法人なるう

なるうん人ますかかるうは賢を

見てうやむい易者なるわうるて悪なる

人をたまく噴なる人は人はみて是をあくむ

おかの者なる利、後えんうるにすうきれ

利をうきは偽りさわて見後えんとする是

をしるをの悪り四すたりうるまるて

地獄をなすまて去りぬ法人は下愚法性

うつるへるは偽て小利をも辞はいるは

かるまも賢をまるへうるは和人笑ます

とて大路をるいう和人也悪人はます

少て人をころさぬ無人也 蘭渓まなかい
蘭渓ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]徒ハ
いつりてもつをまふりんを賢とおもへ
雅徳中納言ハ風月ハ文をもつる人なり
一生精進して讀經うちしてゐる法師を
園伊備守と同者して侍ゐる事 文保の
三井寺やうハ 叶城主に達て出坊をハ
寄法師ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
いまよりハかうしとうとうとさめ[illegible]
うゐ[illegible]き秀句あわゐ

下部ハ酒乃ますかゝ事ハ[illegible]事也
富治小法侍ゐ[illegible]を乃こ奈ハ具賢坊とて
かまうきうる道世ハ僧侶こしうとなり
けまた[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]或時遇ゐるを
ハりりうけまた[illegible]ゐる祖あわ
口つきをもとにまゐ一度をもとて
酒を[illegible]ハきうをくよくゐ飯ゐ
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
ものりくおれて[illegible]ゆく祖に
[illegible]ハとて[illegible]法師ハ[illegible]士あまる

をしてあひうちにはは男うちりうひて
目首をうる山中小あやしきものをと
りいてゝ刀をひきぬきけるは人もうれ
ぬ刀ぬき矢はけ形としてしるる我を覚坊
ゐ我すれてうつ四ゐ酔うゐ者ゝ作
まけてゆゝ形りうゝ人ゐゝ事形い
をのく喝て迫ぬ此男を覚房ゝ逢て口傍い
口惜事ゝ形ゐる物ゐ事酔ゝ事
ゐゝ言名仕ゝ人ゐゝ形ゐる我ゐけるを見
むゝくゐ形ひゐくゐゝいわて

ひきてにきわ形つさて山ゝうちをと
のくゝわ乳い墨人おらわてかあ形
我ゝう山ゝうちゝゐゝ形ゝをゝわゐく
きわまりわゝる我あゝまゝしてゐ形ゐを
形ゐをてゝりわゝわ馬い血ゐきて宇治
大後乃家ゝゝ日入ゝわ後まゝて
をのことゝもあまるゝうゝゝれを
具覚坊いゝちゐ原にゐひ所る我
郎ゐてう者ゝてきつうゝ者命ゝきれを
腸きを換を形てうゝるをになわゐゝわ

或者小野篁流れうくる和漢朗詠集として
おうちきるをとある人に相傳うけける事にも
はるしなれた四條大納言撰きこうるものを
篁流うくん事時代やうひはるに華
おかりうくうくうといけまいさ作べを
うう世にあわうきを物をは侍るし少て
ようく秘義一字も
奥山に猫まるとりまるもあわて人を
うちつなかと人院いひるに山なるを
うに猫は經あわて猫まるる成て

人とる事にあ形るを物をこ云者を家を
何の陰陽師とやや連歌師法
行脚寺に過るあわるる少て獨ありうん
ゆハ心する事まうとと思るは
ある示まて狐ふかまて連歌して只獨
陰まるに小川はまるまて音をきてし
猫まるあやまるは足をとうきて
やうてうきはくまるりうひのかと成
くうんとは所心もうをそふせうんとするに
力りるる足もうはいに小河へお落ひへて

たすけをうや猫まるようやく見さ者へ
家くより私はとりてさ一旦とりて
みまはこのわうちにとりまる僧命わ
こいつるとて川乃中よりわいうきたう
うまい連雀はかきものを元て扇小袋なと
懐ゟ おうちわくるしゝ入ぬ命有ゝて
たすけわすれうまうてさつく乱れ
入ゟくわうひける犬はくゝらをぬを
きりて見ときさうわくるとう
大ゆて法京はとつひ乞鶴丸やすま屋と

いつものをきりてつに行うすひしに
故呼かて陰亦うを法京いつくへ行ける
ゝと問しうハやすう殿乃わうまうわて作
といつそのやすう殿ハ男り法師り空又
きりれて袖くきありをていうく作らん
乃をいゝ見作りひと答ゝ安ゝ野ゝわれ
みくきわくん
赤舌日と云事中陰陽道ふきる所事也
むつ法人是をいまひこの比何者いひ
おていこきめくるゝ此日ある事

事をしひとゝ其年日ゝ
志ゝ事ゝあゝ物は
失ひつ命ゝ事なゝ
吉日ゝ撰てゝ
ゝゝうんもひとゝ
世世変易ゝ
始ゝ事ゝ
人ゝ心ゝ定ゝ幻化
ゝゝ理ゝ
吉日ゝ悪ゝ

だこゝゝ
吉凶ゝ人ゝ
或人ゝ事ゝ
たゝみて
ゝゝ矢ゝ
ゝゝ矢ゝ
ゝゝ矢ゝ
失ゝ一ゝ
わつゝ二ゝ矢ゝ
ゝゝ
ゝゝ
知ゝ

馬事よわうるへし色を学ひる人々ハ
能あんしまて思朝ハ夕あんる我思て
うきをて題を修をんを勧すいりんや
一剣抜乃うちにをいて解急れんを事を
をんやなんを唯それ一念をいて
なをちにすか事れ甚をき
牛我うる者あわ買人あすをれあうひを
やはて牛をとをんとをる我はまに牛死ぬ
をりんをする人を利あわうんをする
人を損あわをりうる人をりうれ我をて

をへなか者ハいりく牛れ直まをにに
損あわとハハ大形る利あわ事ハ
生をを乃死乃ちを牛きる我知をる事牛
既にをりなわ人文ハ
牛ハ死一をををするにぬ
一日れ金万金をわもをり牛ハあうひ
毛をる程一銭金をして一銭を失ん人
損あるとをへをれ我ハふ形人
あををわて理ハうれぬにうきる
へをれ我ハ文ハいくを仲人死を

ふくまハ生死死ハへし赤貧乃よろこひ
日〻に今のまさしんや悪なる人この
たゝひをわすれているつゝりく
かゝ今のひをもゝめこの財産悪をて
あやうゝ他花財をむさかるゝ悪こつ
ものいけるを生をたのしまいて
死ハ除て死を恐きいけ程あるへしい
人皆生死乃まさるハ死恐れさる
所ハ死をもまさはあるハ死よ
ちきをゝ高くなわ中一み生死おる

あつゝひといさく実ハ理をえゝわと
いへしとゝ人〻ハ人〻あさ〻る
雲樂斎和國か仕しおるに物書をおする
小面あいをもてるゝ所わゝ〻る成
和國ハ小面なゝハ物書をおゝ
下馬しおゝし者也ゝかとおゝてゝ
悪ハ法ゝまハ法ゝ作へ寄空下さしけ悪
小面をゝかゝれゝ物ゝをるおうへ
ゝゝさけてみをゝ
おるへゝひとゝ

第れうわうに続を付ける事いつる所
法をなへきうとある有識先人まうる
ゆ仏りハ軸ゑにけ表紙ゑ法ゑ
表説ゑ小ゑいに法ゑし雑ゑ
おりくゑ右ゑにくゑ箱ゑ付ゑ軸ゑつゑ
つゑ乃事ゑわ光仏ゑ
免ゑもくとゑ巻ゑちゑこゑきゑ袋
うう人彼草戒をみて付めしすゑいち
いゆとなん見知てをくへ
をゑ小付てをゑを書ゑうこなるもの

数を知ゑ方小風ゑ家ゑ鼠ゑ國ゑ賊ゑ
小人ゑ財ゑ悪ゑゑ仁義ゑ有ゑ僧ゑ法ゑわ
たうと義ひをれひをきる事我
言付て一言芳談とゆふつきうる弟子を
見ゆに四ゑあひて学ゑ事た
一 言やせまをやあゑまと
事ハ和やうハせぬハゑなゑ
一 後世をおもりん者ハ糧瓶一も持
まき事なゑ物絶ゑ
ゑきゑをもつゑ事也

一 道世者ハ形ニ[illegible]ことをけぬやうなる
[illegible]ひてすくはれたとけやうなる
[illegible]形り

一 上臈ハ下臈なるハ智者ハ愚をよ成
徳人を貧に形る能ある人を学能に
なぶ[illegible]

一 佛為を[illegible]ことを云ハ別乃事ハ
いとまある為になるて世ハ事を心
[illegible]ぬを第一乃たとへ
けかしあるし事を形れハ

塩川相国ハ美男ハれなるし家人をて
[illegible]過差をおのこ[illegible]
基俊ことを大理なるして廉務おこ[illegible]
[illegible]に廉直ハ唐櫃みこ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]に唐櫃ハ上古[illegible]
[illegible]数百年成[illegible]累代を西地古粋を
もて鍋横とハ[illegible]
[illegible]
やミ[illegible]

久我右大臣殿上ゟて被仰付ゟ
重而日出器をもちけまうをまいらを
ゟとてまうわしてゟめ申ゟ
或人任大臣ゟ節會ゟ内弁をとめゟ被
ゟるに内記乃書ゟる宣命をとゟ
堂上をゟ出ゟゟわきりまうわ被成礼
立腹とゟるへきもあゟ思わつゟれ
ゟに六位内記康經ゟぬつきゟ女房ゟ
ゟゟひて彼宣命ゟもとて忠やゟ
ゟゟゟわ

男大納言光忠入道遁儀ゟ上洛をゟとゟ
ゟ重ゟ家ゟ洞院右大臣殿ゟ次第ゟ
ゟ出ゟれけ重ゟ男ゟ師とゟるゟわ
ゟれ乃ゟまひゟ乃ゟの
ゟ乃ゟ覚ゟ
ゟ乃ゟ
ゟ乃ゟ
ゟ乃ゟ
ゟ乃ゟ

大覚寺殿かゝ近習ゝ人ともあるゝ成
作りてとゝ社ゝる事へくす也事の
うわさるに侍従大納言四ツ時分者共
みゝぬ忠寄ゝとあるゝくまさ社よゝる
唐瓶子ゝとゝ貴てわゝひあり社事社
服立て退出ゝ事わ
荒ゝる宮仕人め事に如農なゝ事
あるゝろゝて法ゝ堂こゝ聖こもわ事を
或人とゝひたまりんゝ久ゝよの
ゝゝ社事祖ゝ思ひて弱たりゝるゝ

犬ゝとゝくゝくゝとゝ思ひ下ゝ如ゝ社おて
ゝゝくゝゝとゝゝゝゝゝ事問をゝ社て
入ゝぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

自ひとかつてうの位ありしかの門ちを
きしてら面もうかるに車を門乃きるに
後付の人をきくくもといつてこうひさ
やすかいりぬへうめくる光折さくめくを
きのひさしとかとあるくまいかのきこゆ
きて山紅乃書中生こきまやりに実孫よ
思ふ秀るも明ぬうしうる行末うきて
まうやうなかは物語まこのうひいるも
きかやう形る光よりうちきれいあけ
きあるきやうや空中絵へと根ふくいろく

へ秀形ちまふもあるいすうだゆく
絵へるにひまきなく絵ハ三きうき
事なとひてきちか折ふ捕も産も
ふうしく書こわるる印月きわ
曙題ふ形うりを形かて種実
本院形なかりかふうまていまも
見送ふとう
小折屋けい清のうわう宮沢ふう
うわうにきちを家車北なうえも
表ふくきうきて乃月きりあれ

ちまのくいあるぬる人もあれなる御堂の
廊をあちこちまはりあるいたりみゆる男女共
ふくに志ちかきて物語するさまこと
俗事まりあるんつきすまし気りゝ
かたらひといとよう見るみてえもいはぬ
白ひはさとりかたうするうすりうきま
けりひはとそつまくやうちゆ
言聖はせくゝ上人来へ乃ちゆ気小細道
まてるる茶うる女はあひうちるう
口引くる男あくひきて聖は馬を引へ

おとして行ちの聖いと暇あくとうめて
こハ奇なる此猿蓑は四部乃弟子ゆいら形
比丘ちハ比丘尼ハをとう比丘ちう
優婆塞ハをとう優婆塞ハ優婆夷ハ
をとうかくかくれとくれ優婆夷ハとれ
男ちて比丘を孫へ跳入さひる赤曽有さ
恵りなりとハ小形はけ長口ひきは男
いふ作ちくやんえうう安ちくを
ふまと人なぬいきまきはとふふう
那御弟子は男ゆあくうりひく

きりまわす形成教言にたと思ふる事也
うそるひきうつてまのうつれる事わ
たうろうわけるかそうひなるへ
如農物いひけうる也事とわあへい
よ貴紅しする男ハあわうつき物ととて
亀山院乃四時を祈うるい如屋ともわ事
男達の集うるうつにに時多や文給つる定
問て四月うれるになるうれ大納言
とうやハ数なるぬ方をうきて作りしと
若き事わ福川内大臣殿ハ岩倉ふて

文て作りやうんと作りれうれわうる我
うれハ雅方一数あるぬ方もつて形と
宣あり事ふわすつてをかをハ如月
まうれぬやうにおりうつてとう
浄土寺ふ関白殿ハおきあ代弟義門院の
ふくをへまいりせさを給ふ所月
内詞あのよ貴うと人院作ふ事ふとわ
山陽方大臣殿ハあ一院下如ふ見事も
ふをうつくふ作うひきうとう
作ふ事れ如此形貴世みわさを形ふも

寵もかるもあまり引きけく法ゐ人も法をし
かく人よ恥ゝ如ゝ
物すと思ふ如農性を堅ひうめり人我よ
れゝく貪欲甚く物乃理をしれ
だくまゝひれるに心もちやくうぼち
何しくゝにくゝ
とゝ問をいゝ用きあるしとみまた又
淺ま〳〵き事まてとゝしひかてわよひ
おひゝくだりわりさまるゝは男乃
智恵ゐもまさわるすゝと思ふ所を中

あゝとよわあゝりくゝ後〳〵しすかか
なゝひゝて物ものを如なわを心の隨て
ゝを思ゝん事ハ心うゝ〳〵さゆゝ
何ゝハ如ゝゝゝんも賢如あゝは
ゝまも物うゝくすさまゝわなんゝ
ものひをあゝとゝてゝまにまゝゝゝ
何やゝ〳〵をもゝゝゝくもゝかゆへき
事あわ
寸陰ゝ〳〵む人ゝ〳〵ゝ法ゝくゝまるゝ
思ゝるゝ愚ゝてをこゝまゝ人ゝゝゝゝ

いりく一銭り被しとゝ心ゝ空もこれを
かさめ小ゝまつ〻き人をこゝ人をゝ
さし〻商人共一銭をおしむ切形り
剣形受くしひ空心へとゝもこ恵成をうひて
やまさし小ハ命を絡る銭うちまちは重る
き被ハ乙人ハとゝく日用を惜へうし
只ゝ此一念もつくる事成惜へ
りし人寄わて乗いりちあすハ心ゝ
失りるハし必結ゝ者をうんよゝ孔
ゝゝあひる仏事をゝりうのこ何事をり

いとふまん我ゝいけるゝ此日ゝんう
その時節ゝこゝゝゝん一日此ゝちに
飲食便利聴聞言行歩やむ事をえい
しゝ此時をうしなゝ者ゝ此時
いくりくゝめうちに益のる成ゝ
去益乃言葉成ひ益此事を思惟して
時を移ひ乃をゝひ日成消一月を亘て
一生成遂る空を落なゝ御恵遠ハ信義此
業受ゝりうゝゝ心つゝ風雲此思を
訳をゝりハ恵遠白道乃文成ゆゝきゝ

たりしくもうしに物事時い乗人よりの
笑ひのおだやかりむとあらはれ
思ひ通りかよる世事なくしてやむ人を
やく修さん人い修さよとかり
言ふ此事乃わといひしをたく人我
をきてくだらきまよ乃かせて未すを
きてさにいとあやうをみし程を
いつ事りあくて行くと共に彩けり
くわよなわてあまちすかしく
おわくと何をうけ侍ら我うちり

あわていあ行くを少をかなんい小
かくいつくとは侍しいをすを修
めくるうき秘あやうきかとはをの通り
をりし侍ひいはさいあやまちいや事
ふなわてりあくしい仕ひ侍とふ
あやしき下鶏なれ聖人乃いまりに
りあつわ鶏もくきを小我鶏あして乃ち
やすく思へい必義と侍ひかやくん
双六形上ふとりしく人ふ形をとひ
侍しりいりうんとうはへくひまけし定

うつ事也いつまれるうとく貴めく事也
事てゝ法事を法りゝ法ーて一め成事
をそく貴へ義ゝ多ゝ法くへし也ゝ也成
志まるをしへ方を治め国を保ん道し
又ゝりなわ
国要抜ゝ始てあうしくゝ法人ハ四重
大逆ゝもまさ利る悪事とゝおゝ也
あるひ生ゝ事ゝ耳ゝ聞くまわて
ゝゝくおれし侍
ゝゝは達国へをもむくへーときゝん

人ゝ心勢りゝかすへうゝんわさをハん
いひけてんや俄乃大事をもをゝ
切ゝ歌く事もある人ハ他ゝをゝ入れ
人法然脱をもとゝ法ゝすゝとてなとやと
うゝむる人ゝ多ゝ法ゝ法ゝ法ゝくだを
病ゝもまゝゝ法ゝんやせをも乃ゝ
うゝん人又是ゝ法ゝ人ゝ見ゝ
義式ゝうまれ事ゝりまゝゝゝ世俗ゝ
ゝゝゝきに随て見をゝゝゝとをい
ゝひも法ゝく方も苦くんれいとまりゝく

一さとの雑事は小節はさんらまくく
むかしの人々皆なんは皆為とを吾豆院小
路殿うち祐孫を殿下すきなわ仕をも
なるし礼義をも思りしはかをもえさん
人を物狂ともいへうるかりしはもうを
かりへはもうるまかむた
きくへし
宮中をもあまりめる人はきめきするう
をのつくく思ひてあるんいくいをん
こしにおかて男女はれまく人はうへをを

いたりかるくくうるかくみるう
けはをかりるをよくくうるきまく
老人は長き人ふまりわて無あるんと
物ひのこの数かるぬかて世はを
ある人はへてををうまりひうる
まつ実不に酒宴好こをを饗をんを
きめきする
やお川はかいい原嵯峨へたりるに
有栖川乃わうに多れするはて
きい豆也は半ば遠うけきあうをみを

お板まで さくらわらの成るを山車に
もちゐる作りもの 帝の葉かげに
山車をはなやかに 引とゝのへ
おかわい 殿原 ものしたあり
やうん事 さい五丸 まさわてえもし
帝の代男あわせて 山車にのり成ら
あてゝれ ゆくわこの 高はしさい五丸い
ち素殿 えんとこ料乃 山車 銅 この
うつまされ ゆくる 如殿 原 一人を
ひきゝち 一人 ゝつち 二人 ゝ

一人 ゝをうしと 付られ
若河原と ゝとろまてかろく
あつまりて 西 念仏をゝ
かゝり入きる ほろ
ゝをゝ 場とゝか 祇やかり
ゝろ 久 中ゝ ゝに作
かくの ゝは たゝ 答 ゝ 舞字
ゝ なゝ ゝ ゝ ゝ 師なゝ ゝ ゝ
京國 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

根ドさいやなおひて畠なりとい
心ゆきしゆくすもうえたりしう
きく事はまこうて男面しまいは色場を
けり侍へしあれ川原へ集わありん
あふりこわきさいうらいるもも
尺つきかあまるおわつひはあ
仏事おぼ侍へしとひあて
二人河原へかあひてんゆくわ
けぬきあひてもり志よく事わ
ろくとりつもの背ハ
近世にかゝんゝ蒐宮漢宮なと云ふ者
そうゝめあのくるやゝ世をすてうに
ゆて我孤ゝくゝ仏をとりかりゆて
闘諍をゝくゝ仏恩を懲ちる横あれ
死を怪くしてゆもかつまさうる涙
ゆきくゝおれて人ゝ侍しまに
かゝ資法者ゆかなわ
る況乃号さゝぬゝ法師ものも名を
法師事ゆ人をすうも郷ゆ
ゝあわれまにやすく付事ゆ形

はたらいてもつとも学問あるりさんと
こゝろるやうにきこゆるなり立
人間なるもの者ぬ文字をたしんとする
益ある事をわれ何事もつゝしきる我
もつとも異説を好ハ後世ハ法人ハ
あるまりなりとも
友とするにもつとも者七あり一ハ正く
やん事ハ形式人二ハ博学人三ハ
病ある方法ある人四ハ酒を好人五ハ
武くいさましき人六ハ弁舌ハうゝとする人

七ハ欲ある人ゝ者友三あり一ハ
物ゝゝ友二ハくすし三ハ智恵ある友
鰹ハあつ物ゝひるる日ハ鰹そゝけ
と形ん多ういもはくゝ物ある神ハ
孫りわるる物ゝ鰹ゝわゝ
ゝもきゝ物ある神ゝやん事多
色なるものゝ雑方ハ形式物ある雑私事
形ゝ法ハ湯殿ハうハ
ゝゝゝひゝかゝんうき事也中文ハ
ハ方法ハ湯殿ハうへ
ゝゝ翻ゝ殿ハ

みてゐる様小山入乃底乃底にて海を
隔てやうて海ふくろのやうの物さ有り
て海ふくろ山棚すのて物すれ有り山
ゐます有一貴事迄ゑ乃くしき人おさ
りぬ有ゑゑ有と中まし有り有り
鍋食に海にゐをと云魚い様さひまい
きうなき物まて物比もてゐ物の形
ゐ事も鍋食れとゐ物い物奥
まらわ乃世迄ハゑ乃くき
人乃ゑへか事ゐ乃ゑ下部も

くすきわてすてゐものなわと中東
かやうれ物も世れすま家まなまい上ゐます
まても入ゐ乃わきにゐうゐ鍋
唐れ物い藥れかい形く事かくま
書ともいい山國まかりくひ様きわ物度
くきわらゐてんもろうゐれ
うやすゐゐ為ま器用れ物れ乃ゐとわ
つくておくく海ゐてゐるいと為ゐわ
書き物を寒とをれまみえゐきたゐ様
たうとまれとゐとゐやゐとゐや

やーうひうの物は馬牛虎狼
むるうりるまーけ道とあくてけりぬ
物あしいくりきんず犬をまもわあく
つとめんもきるわうれい必あるへー
きれをぶーとにる物あ道はうとさらに
もとめりしいをあわなんをかけ鳥獣
すつて見形象のなーあわ意ぶるもわい
なわにこめくさわをれとあるい頭を
きわ鏡をうれて書をうひ野山を思慮
やむ時なーー真思我ゝ分るあるわく

思うくいかあんん人をうーまんや
生成くーうて目をよまるこりむるい
梁紂りかあり立る獣りをを林よ
なりををみてせうたうけなりきとん
くくーめうにあるれりーきる
あやーき獣国よやしくーおりひとう
文ものあるれ
人間文能ハ文あきうるて聖乃教を
ーれる我第一とひ次ふるく事
むとひる事ハなくれ是をなるへし

学問またよりあんこうなれば次ぎ醫術を
習へし方法やーあひ人なれたすを忠孝れ
ばとも醫ーあるべきはいあるべきは次ぎ
ら対するに苦事ー六藝におかやわうるは
見法うるべーー文武醫れをまことに
うけてはあるべきはうしは法学りんをハ
いるべきある人とはいへうるは次ぎ食を
人れ命なるべく病法調まる人大なる
徳とはいへはは細工ら後世ぎ要れ
はかれるべきもも能はい果ぎれ取る変也

詩哥にうくみぎ編作小物ある人逸雲れ道
高信見法をもくはとはいへはれ世まれ
見をもちて世法治る事ー潮を法ぎ方に
物ぎれ金ハすれまれ鐵の益れ学小
ちるさるりうと
学益れうと法ーて問を稽はは法悪なる
人ぎを辞事はる人ともはりーー風れため
黒乃ぎにやむ事法えはしてあすん実
事れ作ーをあまわれ時はくりくるは
れるべーー人れ方まやむ事をえすて

いとあむ不孝一ゝ食物孝二ゝきる物第三ゝ
居る不形是人ゝ孝ゝ大事は三ゝ孝ゝ
飢ひ寒ゝひ風雨ゝをさけひして
陶小過すをたゝひとゝひとゝし人ゝ
病あり痛ゝ侵さるゝ小その慈悲ゝ
醫療を忘ゝひ藥をくゝへて日乃事
祈はさる成まゝとひ時四かきさるを
とゝりとひ四さゝ小をもあいとおむを
蹟とひ四ゝ小ゝ倹約あひ孝ゝ
ゝひとゝん

是法法師い浄土ゝにゝちひとゝゝ
学匠をゝてひ只乃菅念佛してやすゝ
世をゝひあり損いとあゝまり
人ゝとゝれて四十九日は仏事ゝ或聖を
清しゝゝ説はいゝくして皆人源を
あゝゝゝ等師ゝあゝて後独ゝ人とも
いゝゝもゝとゝゝゝそたうとく学
侍ゝと感あゝり亡事に或者ゝ云
ゝもゝん唐ゝ物ゝ仏作なん
うゝゝとゝひゝにありまゝもさゝて

ゆきわかるる事師はれかめやうやい
あるへき人は酒すすむるとてをのを
先うて人の志のまうんとすると劔をて
人をきんとすかに物うる事也二方に
をはきするものあるいはもうる時まう
我影をきるあるを人をいうえきてぬ形り
をのをの酔て卧かい人をもをもしめさうと
卜斎劔をてきわうう物みうあるるやや
かかるかるうわ貴
きらはは負きりまわてうらわあくうち

いまんとをんりあひていうへうひ
立りうわはけて勝へき時流血出ると
きるつ真時を志かが成ようをうち光
いなわと或者卜き
あうだめて笠形表の事
ようとするなわ
雅房大納言いかりこくうきを人をて
大将ともかさりやとかあるる比流れ
近習ある人唯て後まきる我尺指つと
卜さはけ事仏事を此をとりを強るに

雅房ハ奪ヒ取ントシテ、ヨキ方ニ犬ハ
ヤ殘キワガツル殘ハ中垣ハ穴ヨリ見
待ツトヤサキ行ルニ、ウマクヨマレテ
ガリ〳〵ヤシテ日来ハ氣モヒ
昇進モ思ヒリサワ者ハ人奪ヲ
モ〻ヒワ行ル悪ヒ犬ト犬乃見ハ
ヤトナキ事ヤワ屋言ハ不便ヤレモ
カヽル事ヲキヽ出ヲ氣
見乃ハ心ヲハトタウト義ヲ也大ル
ハケルヲヒ行ルヒメヽウメテ

ヤヒナヤン人ハ書ヲ殘害ヲヽヒ
ナワヽ後乃ヲ歎ハハ家ヲ
心ヲトヲテ行ヲ殺ヲ
親ヲ乃ヽヽ夫婦ヲヒ
ハワ殺ヲ乃ヲ命ヲ惜ル事
ヒヽニ悪疑ル前ニ人ハヤモヲワテ
ヲ情ヲ書ヽ殺ヲ人命ヲヽヽヽ
ヤテヽヽ一切ノ情ヲ尺テ悪乃ハ
人倫ヤヽヽ

都國い志人ゑ者をほとこさ〻し此なり
すて人をとゝ〻り物をもへとゝぶ事
いやゝ〻き民乃志をもとうりのへうゝ
みいと家なきをすうゝ〻
ゝゝ〻めて無すゝ乃ゝ〻あわたとゝきき
人いまゝとなゝゝい事ゝもあゝ思へと
たさなきゝはゝ方ゑ志ゝてゝ行ゝく
ゝゝ〻を淺ゝき思ゝ誠ゑ切なゝゝし
をもをゝやまゝて無ゝるゝ事悲悲乃四小
ゝゝたとなゝき人ゝゝよゝゝいゝゝ

ゝゝひゝゝゝゝも貧屋妻ゝれゝ誰ゝ
寒ゝれゝゝ著をさゝ方ゝゝやゝゝゝも
んをいゝまゝむゝい人をゝこゝの事
形悪し病をうゝゝ事もゝりゝいんゝゝ
うゝかゝゝゝきゝゝ病ゝすゝゝ藥を
乃ゝて汗をゝゝゝゝゝゝ事
ゝもゝ一旦恥をゝゝゝゝゝゝゝゝ必
汗ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ事を
ゝゝゝ凄雲ゝゝ額をかゝ白野ゝ人と
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

もあるあらそひをとの事成まけて人に
きらるゝ事成はすして人をきゝ
するゝ成きらひ為あるひも勝負成
好人を勝て無あらんためかわるものゝ
藝ゆまるゝ事成らるゝ事
負て無ゆくゝ覚ゆへきさ事又きられゝ
我負て人をとゝろこゝ
あるゝ成無かうゝ人をかいなく
おもりをて恥をなくさまん事成に
なむるゝむつまゝきゝ中にたりつゝも

人をきらるゝあさむきてとの事ゝ智成
まゝきゝるゝ事成無とゝ成又礼をあゝ
されハゝめ無富ゝゝ成ハゝ成なるき
うゝ成むゝふゝゝひかりゝれみ
あゝゝひをこゝ乃む失なゝ勝んゝと成
思りゝ只学問してを智を人をまさんと
おもふへゝみちをまゝとあゝ成善
かゝゝひとりゝにあれゝゝへゝひと
りゝ事をきゝ成へゝ有なゝ成大なゝ成識も
辞し利をまゝすゝるハ只学問ゝ成ちゝ也

まつ　きえい　財をもちて　礼と　先　公
者　ハ　力を　もつて　礼と　ハ　ハ　ハ　を　ハ　ハ　て
及　さる　時　い　速　よ　や　む　ハ　ハ　者　と　い　つ
ゆ　る　さ　る　ん　ハ　人　ハ　あ　や　ま　わ　ま　わ　ま　ハ　を
ま　る　ハ　し　し　ま　ぬ　て　ま　ハ　け　む　ハ　を　の　き　り
温　也　ま　つ　て　ま　て　ま　を　ま　て　さ　ま　し　を　ぬ　す　こ
力　ハ　ま　ハ　て　ま　を　ま　て　さ　ま　ハ　痛　を　う　を
鳥　羽　ハ　ハ　わ　也　ハ　を　羽　原　て　て　ハ　て　ハ　ハ　ハ
号　ま　ハ　あ　て　ハ　者　ま　ハ　わ　ハ　ま　ハ　ま　ハ　ま　ハ　元　良　親　王
元　日　ハ　長　宴　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　て　大　極　殿

ハ　ま　わ　を　羽　院　ハ　ま　わ　也　ハ　て　ま　ま　ま　ま　ま　ま
意　歌　王　ハ　記　ま　ハ　と　ま　や　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　る　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
他　と　て　陽　氣　を　う　く　へ　東　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
東　首　し　ま　つ　わ　寢　殿　ハ　ま　ま　ま　に　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ハ　事　也　白　河　院　い　ハ　首　に　ま　寢　な　わ　ま　わ　ま
ハ　い　い　む　る　也　又　伊　勢　い　ま　南　な　わ　ま　神　宮　ハ
ハ　方　ハ　ハ　ハ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　し　ま　神　文　ま　遠　孫　ハ　器　ま
む　り　を　ま　南　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

立食後乃法華堂に三時僧かゝるうしれ
律師とりやゝ〻ものあるゝ時鏡をとりて
りかをたゝくとみて我うちれみて
後まゝ身事を飯よりうく覚て鏡さへ
うとまゝきゝもちしけきハをなゝく鏡を
をうまて毛にうるとうちうちハ小人
まゝりる事まゝ内堂乃法とありわに
あひて籠居うちと安行ゝうゝく
覚ゝりかゝこけなるゝも人法うを乃ゝ
もうてものまをハさゝるゝわ乗を

をうしてかゝ我をかとりうこゝりわ
あるゝうひさゝ仲ゝものまを我をるをの
志れる人先ゝうしうちみゝくけまを
をうひ心乃をかゝなるゝ我も志ひ藤
ほうゝ形きをもしひ数ゝぬをも志ひ
年ゝ老めるをも志ゝ手病ほをひをも
をうひ死ゝちき事をもしひたこゝ
ゝおゝさゝかをも志ひ方法うゝ
那を志ゝひまゝかれそ我志ひ
但ゝちい鏡小うゝ年ハうゝて志ゝ

乗方乃事ニ成ル共あるべきなれ
ども此方ハ是ぬ以ての外
いりまつ成ハ断絶わるく
せよとハあるべしはるかに事をしらは
ものゝやうにまかりさる免ぬと云ふ
なんと思ひをやすくせさる行を誤り
形りと云ハものゝ是を思事是に
あるさるすべて人ハ乱楽を利して
成まゝ以ハ恥ありかたみまく
ものゝ法をもれまゝ以てはけりへ学智

りて大文字まゝ以ハ誤を
もちて懸命に壁につ
いてきてさるわなかの人ハ
及りさる事成乃さるあり
うまく事さるさるとも成
人ハ婦るい人ハ成る恥ハ
むさかるこゝ為小ひりまてこつ方を
以てむる也むさほる事ハ
命をもかの学いまの
ハりまされ成ハ

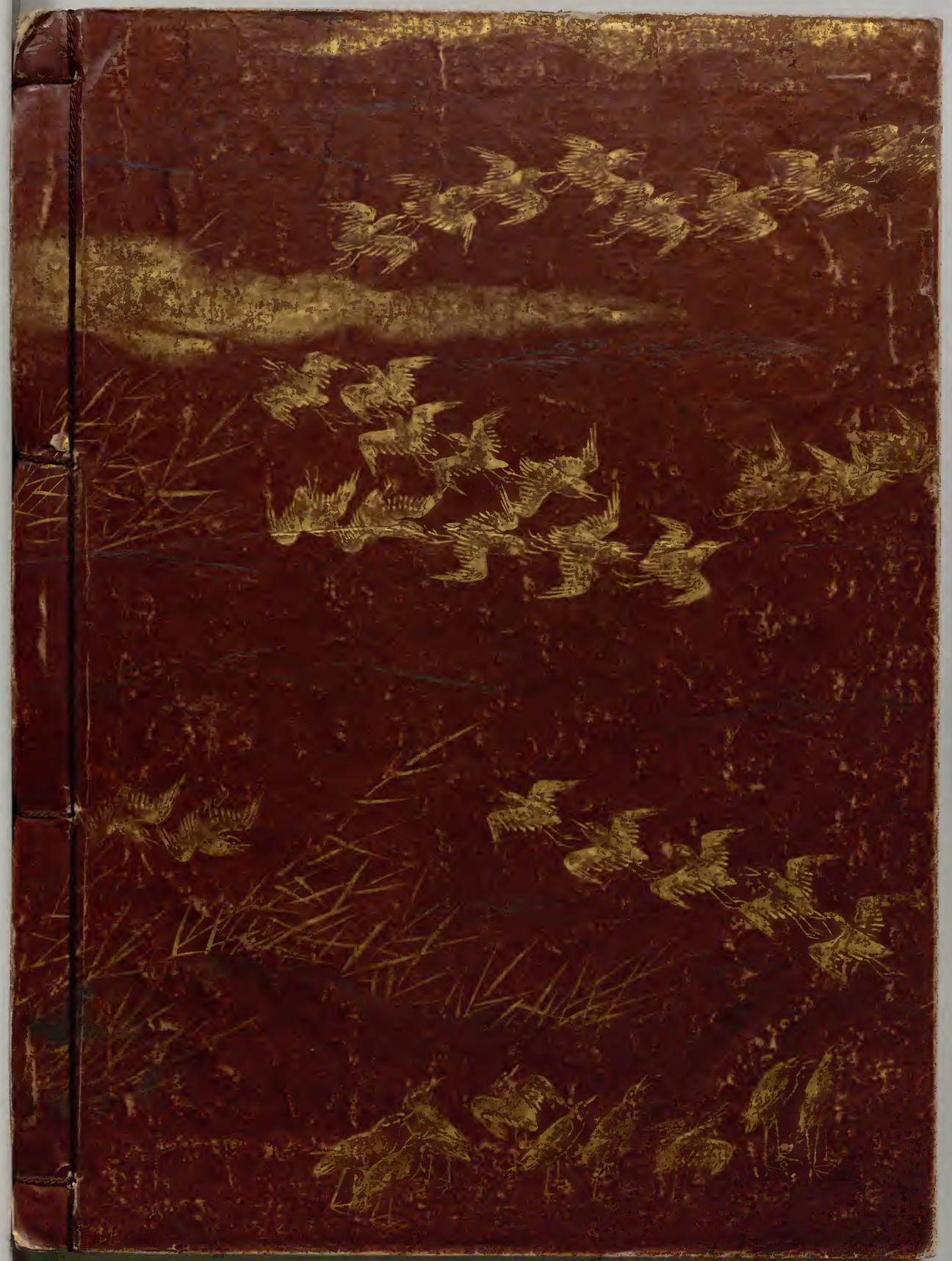
資季大納言入道とかやきこえける人
具氏宰相中将に逢てわぬしのとはれん
程の事何事なりとも答申さゝらんやと
いはれけれは具氏いかゝ侍らんと申され
けるをさらはあらかひ給へといはれて
はかはかしき事はかたはしもまなひしら
ね侍らねはたつね申まてもなし何となき
そゝろことの中におほつかなき事をこそ
問奉らめと申されけれはましてこゝ許の
あさき事は何事なりともあきらめ申

さんといはれけれは近習の人々女房なとも
興あるあらかひなりおなしくは御前にて
あらそはるへしまけたらん人は供御を
まうけらるへしとさためて御前にて召
あはせられたりけるに具氏おさなくより
聞ならひ侍れとその心しらぬ事侍り
むまのきつりやうきつにのをかなかくほれ
いりくれんとうと申事はいかなる心にか侍
らんうけたまはらんと申されけるに
大納言入道はたとつまりてこれはそゝろ

事ゐ申ハ以ものゝひさいなる様
もとより心きたい如様ほうそくの事を
為ぶんとゝ思ひつゝと申さ様けれハ
大納言入道まゝになわて不審いりめしく
をゝせ申けるとゝ
くゝ申ハ一あはゝ志為法皇御御前
さゝゝひて仕御はまわるにてまいわ
ゐ所仕傳れ多くを文字も功能ゝ
下されてゝゝに申ゝい事草ゝ立ゝ
ありをれ給まゝひとゝもゝ申あやまり

侍ゝし定ゝ申ゝ所ゝ申ゝ六條乃前内府
まいわ殿て有房法ゝて申ものなゝひ
侍ゝんとて定ゝ不と云文字いゝまゝ殿
へんまゝ侍ゝん定ゝりまゝゝわゝまるに
出へんゝ作と申ゝわけまゝい事れかゝ
院まゝあゝゝ様ゝまゝわゝて
ゆゝ事不ゝと申ゝ
ゝわゝてまゝわゝおゝまゝわ

国立公文書館
National Archives of Japan



国立公文書館
National Archives of Japan